

今週のテーマ

大器晩成で何が悪い？

プライベート向け

へい、えん、
フリーヤカザン
なんだね。

脳力UP!!



「本当なら僕は家にいて、
ごろんとしていたいんだ」



0 円

尼の泣き水

このままでいいのかしら。

買出しの帰り道すがら、そんなことを思ってしまう。

今朝、老尼にこんなことを言われた。

「尼が読書なんてするところくなことがない。口ばかり達者になってちつとも働かん」

わたしはむっとしたが、言い返せなかった。尼寺において上下関係ははっきりしている。

老尼たちはわたしが読書していることが気に食わないらしい。いや、それも正確ではない。わたしは邪魔者だったのだ。永年その寺に仕えてきて人からすれば、後から入ってきた若僧が寺を継ぐかもしれないなど許せないことだったのだろう。

しかし、わたしの本音はそれとは間逆だった。

尼寺の生活は外部からはまったくわからない。

五時に起床し、雨戸を開け、仏間の花を下げる。六時には裏門を開け、朝食を作り、七時十分までには住職の部屋に朝食を運ぶ。九時半には裏門近くの掃き掃除。十時にはお米をとき、昼食の支度。十一時にはお仏飯を盛り、本堂の仏像前に配り、本堂で仏飯供養をする。一時半に昼食を取り、四時までは拝観受付をする。そのあと、茶そばをゆでたあつと、下っ端のわたしが翌日分の食料を厚木まで買出しに行く。

毎日の暮らしの中で尼さんらしい仕事は、仏飯供養と施餓鬼で真言を唱えることぐらいなのだ。

捨て子だったわたしをこの尼寺の住職は拾って育ててくれた。

そのことに対して感謝していないわけがない。

けれど最近、厚木からの帰り道に思ってしまうのだ。「このまま、この尼寺にいてわたしの人生はいいのだろうか？」と。

その日も、そんなことをぼんやり思って河岸についてみると、もう舟の渡しがいなかった。帰ってしまったのだ。

どうしよう、とわたしが思っていると、左手に今まさに帰ろうとしている漁師のひとがいた。

そのひとは、縄をほどく手をとめ、中腰のまま菅笠をあげて、

「どうしました？」

とわたしに聞いてきたので、

「すみません、もう渡りの方が帰ってしまって海老名へ帰れないのです。どうか、舟に乗せてくれませんか？」

と聞いてみた。

「ああ、いいですよ」

それが彼との出会いだった。

それ以降、わたしは彼と人目を避けて会うようになった。

ふたり、河原にある幹が一抱え以上もある柳の木蔭に腰を降ろして、話し合った。

夕陽が水面に溶け、川の水は囁きながら流れていた。対岸には紫陽花が咲いていた。

わたしたちの会話は他愛もないものだった。けれど、それで十分にわたしは幸せだった。

わたしが、

「最近、釣れますか？」

と聞くと、彼は、

「どうも近頃鮎が逃げるようになって少し困っているんです」

と苦笑しながら答える。

「なんでなのでしょうかね」

「さあ、わかりません」

彼はわたしの方を向いて、

「それよりも、僕と会っていて怒られないんですか？」

と聞いてくる。

「確かに、尼寺では男の方と会うのは禁じられています。けれど――」

わたしは顔が赤くなるのを感じた。

それを見た彼の顔も、少し赤くなった。

※

ある日、一人の女性が尼寺にいらっしゃった。

最近はいの疫病の流りもあるから、お参りにくる人は珍しくない。でも、その女性は疫病ではなく、子供が授からないことを相談しにいらっしゃった。

「夫が漁師をしているんですが、最近魚があまり取れないと嘆いております」

女性は間に迫った顔をして、

「私たちはこのままこの地にいていいのでしょうか。何か悪い運でもとりついているような気がして」

老尼は、まあまあそんなに気落ちしないで、とたしなめたあと、

「この相模の国ではいちばん景色も良く、豊かな土地ゆえに天皇様が国分寺と国分寺尼寺を建立されたのです。大丈夫ですよ」

と何度となく聞いた決まり文句で女性を言いくるめた。

※

国分寺の七堂伽藍の屋根の飾りが、夕陽で反射して、水面を光らせていた。

彼はしゃがみこんで、水面を見つめていた。

様子がおかしいと思ったわたしは、

「どうなされたのですか？」

と声をかけた。

「いや」

彼は困ったように笑い、

「実は、今度この地を離れることになったんです」

と告白した。

わたしは息が詰まる思いがした。

「どうして？」

「前も話したけれど、ここいら一帯の魚がいなくなってしまったんです。漁師たちの間では、国分寺の七堂伽藍の光におびえて魚たちが逃げてしまった、というのが定説になっています」

この瞬間、わたしは以前寺にいらっしゃった女性のことを思い出した。

と同時に、彼がわたしに隠し事をしていることもわかった。

沈黙が流れた。

強風が吹いて、柳の葉が揺れていた。

それ以降、わたしと彼は会話をすることもなく、別れた。

帰りしな、わたしは国分寺を仰ぎ見た。

その姿に、自分の宿命のすべてが象徴されているような気がした。

このとき、もうわたしの心は決まっていたのだ。

※

「それから、どうなったのよ」

「尼さんは、その夜、国分寺に火をつけた。風の強い日だったから、火はあっという間に広がって、全焼してしまった」

「そんなことしたら、ただじゃすまないんじゃないの？」

「昔の人はひどいね。その尼さんはすぐに捕まって、丘の上に生き埋めにされて、のこぎり引きの刑になってしまった」

「首を斬られちゃったの？ ひどい」

「不思議なのはそのあとさ。それ以降、その場所から一滴二滴と湧き水が流れはじめたんだ」

「あら」

「村人は、尼さんが罪をわびて泣いている、と解釈して、その湧き水を《尼の泣き水》と名づけたんだよ」

「でもさ」

「なんだよ」

「その漁師さんさ、奥さんが裏で手を引いていたんじゃないの？ 魚がいなくなったのは単なる口実でさ」

「そんなこと、今となってはわからないよ。ただ、――尼さんは自分の運命自体を呪っていたんだらうね」

ベンチ

御衣黄桜という緑の花を咲かせる珍しい桜のある公園のベンチで恋人を待っていたときの話である。

私が座っていたベンチの横のベンチに、毎日座って絵を描いている人がいる。見たところ、60を越えたお爺さんである。鉢植えのように整えられた白髪頭は、永年の苦勞を物語っているように見えた。

時々、向かい合わせのベンチに座っている一組のカップルの方をちらちらと見ているところから察するに、おそらく彼らをモデルに絵に描いているのだろう、と思われた。

毎日のように私はそのお爺さんに会うので、ある日、私は思い切って「なぜ、毎日ここに座っているんです？」と話しかけてみることにした。すると、

「犯人を待っているんですよ」

というぎょっとするような答えが返ってきた。

彼は照れ笑いをしながら、どもりどもり、次のような話を物語った。

わたしは冤罪で長い間刑務所に入れられていました。

わたしにも優柔不断なところがたぶんにありましたが、ご存知の通り、当時の警察の方のやり口は乱暴そのものでして、わたしも、二週間経ち、やりました、とつい自白してしまったのです。

ところで、わたしを犯人だと通報したのは「近所の女性」と報道されたと後に聞きましたが、あれは実はわたしの恋人なのです。

当時わたしはまったく売れない絵描き志望で、ある印刷工場で働いておりました。恋人の女も同じ印刷工場の事務をやっていました。わたしたちは自然と恋仲へと発展しました。

その折に、わたしたちはよくこのベンチで昼食を共にしました。

彼女が作ってくれたお弁当を紐解くときほど、わたしにとって幸福な時間はありませんでした。

しかし、そんな月日も終わりを告げました。

ある日、わたしは解雇されたのです。わたしはなかなか職が見つからず、女の方もわたしを甲斐性なしと言い、嫌煙するようになっていきました。それはそうです。お金のない、売れない絵描き志望に付き纏われても、ただただ迷惑な事でしょう。ただ、当時のわたしにはそれがわからなかったんです。わたしは徐々に彼女をストーキングするようになっていきました。

事件は公園にきていた親子がいて、親が目を離したすきに、ある男が女の子を連れ去り、殺害したというものでした。当時、わたしはちょうど公園にきて、うろうろしておりましたので、当然のように容疑者にのぼりました。その情報を証言したのは、おそらく彼女なのです。

それからもう、25年もの月日が流れました。

今ではDNAの検査が精密になり、わたしが犯人ではないことが白日の下に晒されましたが、皮肉なものです。当時の警察の方や検察の方や事件の関係者は皆死んでしまってこの世にいな

いんです。

つまり、わたしと話が合うのは、誰とも知れぬ真犯人と、私を通報した恋人だけ、というわけなのです。

「——その恋人さんは生きてらっしゃるんですかね？」

お爺さんは苦笑して、「わかりません。おそらく別の家族を作り、幸福に暮らしていることでしょう」

「真犯人は？」

「わかりませんね、今となっては」彼はへっへっへっとう笑い、頭をかき、「もう、今となってはどうでもいいんですよ。見てください」

そう言って、彼は書きかけの絵を私に差し出した。

「向かい側に座っているカップルの絵です。わたしはふと思うんですよ。彼らはこのベンチに座っていた頃のわたしたちの姿と瓜二つなんじゃないか、ってね」

その絵の中のカップルは笑っていた。

亮にはあゆという幼なじみがいた。

亮とあゆの家は近所で共に河川敷にあった。亮の家は一軒家であったが、あゆの家はあずま荘という古風なアパートであった。小学校の時分、亮は毎日のように学校帰りあゆのアパートに遊びに行った。あゆはいつもかぼそい首元に鍵をぶら下げていた。両親が共働きなのであった。あゆは部屋に入ると、まず真っ先にテーブルの上の置手紙を読んでいた。両親がいないときは一人で家の事を管理しているらしく、亮は一人、リビングにて出されたお菓子を食べながら、あゆが洗濯物を取り込んだり、ペットのハムスターの世話をしたり、ぼたぼたやっているのを、ただぼんやり眺めているのであった。それから、二人してTVゲームをしたりして遊んでいると、いつの間にか夕方になっており、決まって五時五分ごろにあゆの母親が帰ってきた。あゆの母親は笑顔満面に、あら、亮くん、ゆっくりして行ってね、と言うのだった。亮は不思議な気がした。平成の家庭の匂いを嗅いだような気がしたのである。

夏休みになると、河原でわりと大規模な花火大会が行われた。平常は人通りが少ない桜並木の土手道にも、多くの屋台が立ち並び、多くの人々が往来し、大いに賑わうのだった。亮とあゆは夏の空がまだうす明るく、人の姿もぼつりぼつりまばらなうちからお祭りに出かけて、決まってかき氷だけを買うのだった。あとは同じ場所を歩きつ戻りつし、あらかたお祭りの雰囲気味わうと、ちょうど花火が上がる時間帯になっているのである。二人は人だかりの混雑から抜け出し、秘密の場所に向かった。秘密の場所とは石切り場と呼ばれる、あゆのアパートの隣にある石材置き場のことであった。山積みされた石材たちは以前引っ越していった石材屋が残していったものらしく、亮とあゆは、そこが一番高い石塔のような場所まで登って行って、かき氷をつつきながら一緒に花火を見る、それが二人にとっての恒例行事だった。

河畔にある公園の先には、あけびの森と呼ばれる場所があった。その秘密の入り口を抜けると、亮たちの手の届かないところに数多のあけびが生っていた。密生した葉っぱの屋根から、午後の時間と日光の匂いが漏れてくるのだった。亮はよくこの神秘の花園にあゆを連れていった。あゆはあけびを見ると、手を掲げてびよんびよん飛んでみせて、届かない、と残念がった。

この公園には白詰草が点在していた。白詰草は幸福を呼ぶ。亮はそれを母親から教わって知っていたのである。帰りしな、さっさと歩いていくあゆの後方で、亮はじっと真面目な顔をして足元の白詰草を摘んでは折り編み、摘んでは折り編み、一つ的首飾りを作った。そして、何事もなかったかのように、はい、と言ってあゆに手渡してやるのであった。あゆは、ありがとう、と言って無邪気に喜んだ。

ある日のこと、あゆはあゆの母親と二人で亮の家に来て来た。なにやら悲しげな様子であった。飼っていたハムスターが死んだというのである。アパートの敷地には埋められないから、亮の家の裏庭に埋めさせてくれないか、という相談であった。亮の母親はその依頼を鷹揚に引き受けた。ハムスターは裏庭の梅の木の下に埋められた。みんな揃って、小さく手を合わせて合唱した。そのあと、母親同士の世間話に隠れて、あゆは声をひそめて、ごめんね、と亮に言った。亮は、別にいいよ、と言った。

亮とあゆは地元の同じ中学校に入った。しかし、亮はあゆを避けるようになっていた。自意識に追い詰められて、しどろもどろになっていたのである。実は今まで一度もあゆの名前を呼んだことがない、ということに気づいてしまっただけからというもの、亮は自分の声をさえ上手く扱えなくなっていた。学校の廊下でぼったりかち合っても、あゆは、どうしたの？ と戸惑いながらも無邪気に笑って話しかけてくれるのに、亮は、いや、別に、などと曖昧にその場を濁して、変に逃げ回っていたのである。亮は人付き合いにおいて、いったん慣れ親しんだ距離が崩れると、すべてうやむやにしたいくなるという悲しい性癖をもっていた。

それでも二人の関係は不思議と途切れなかった。飼っているペットが死ぬたびに、裏庭の梅の木の下に埋葬しにくるからである。二度目は中三の夏休みのときで、また親子そろってやって来た。今度のペットはインコであった。亮は母親に出迎えを頼み、自分はいないことにしておいてくれ、と念を押すと、自分の部屋に引きこもってしまった。が、実際は萎縮の態であゆたちの会話に聞き耳を立てていたのである。あゆは、亮くん、いないんですか？ といかにも不思議そうに質問した。亮の母親は、うん、今、ちょっと出かけててね、と明快に答えた。

やがて、亮とあゆは別々の高校に入り、自然の成り行きで離縁していった。亮はただ鈍く鈍く納得しただけであった。亮はその頃になると、もはやひた隠しにできないほど重苦しい憂鬱の影を引きずっていた。あゆの無邪気な笑顔とは、千里も万里も離れた日陰の世界にいることを自覚していたのである。

それでもペット埋葬の行事は続いていた。三度目は、またハムスターに戻っていた。ただし、些少の変化もあった。あゆはもう、亮の身の上については何もふれなかったのである。それはあゆのささやかな気遣いであった。亮はと言えば、二年前と同じく自室にこもりながら、いよいよわが身の墮落を痛感していた。と同時に、あゆがもう自分のことにふれなくなってしまったことが、少し悲しかった。もう二年も会っていない。どんな姿になっているのだろう。まだ自分にも資格はあるんじゃないか。瞬時胸をゆすぶったそんな逡巡も、あゆたちが帰ったあと、亮の母親からあゆの近況を聞かされて、すっかりなだめられた。曰く、金髪でケバいい化粧をしていたわよ。今じゃすっかり彼氏もいるんだって。——亮は、ああ、そう、と鈍く呟いただけであった。

さらに四年が経った。四度目のペットの埋葬にきた。さすがにもうそこにあゆの姿はなく、あゆの母親ひとりであった。亮は哀れにも多少救われた気持ちになった。四年前と同じく、まだ懲りずに自屋に閉じこもっていたからであった。亮はもう、こんな自分があゆの姿を想像してはいけない、と思っていた。また、あゆにもこんな自分の姿を想像されたくなかった。いつものようにあゆの母親が帰ったあと、亮の母親は亮にある吉報を伝えた。なんでもある有名な化粧品会社にあゆの就職先が決まった、とのことであった。亮は案にたがわず、ああ、そう、とそっけなく答えただけであった。

その日、——亮は久方ぶりに河川敷を巡り歩いてみた。めっきり空き地が増えていた。今ではあゆのアパートもれいの石切り場も無くなっており、雑草が鬱蒼と生い茂るばかりだった。河川敷一帯は新たな高速道路の建設予定地になっていた。そのため河川敷の住民たちは立ち退きを命じられており、亮の家も近く、この土地を離れなければならなかった。

亮は河畔の公園に着いた。公園だけは以前のままだった。あけびの森もそのまま残っていたが、今の亮にはまずしい風景にしか思えなかった。辺りを逍遥してみたが、別段、なんの感慨もなかった。仕方なしにあゆとの思い出を胸に反芻してみた。けれども、——やっぱりなんの感慨もなかった。その感慨のなさが、ふと見上げた青空を少し悲しく見せただけの話であった。

亮は最後の手段として、足元の白詰草を摘んでは折り編み、摘んでは折り編み、一つの首飾りを作り、家に帰って裏庭の梅の木の下に埋めたのだった。

最後の子供

俺はいつも千春に言われる。

「あんたには小さい子の面倒は見れないわ」

そのたびに俺はあいまいに笑ってきたが、実はすごく気にしていた。

千春との将来を思い描くことができないのは、事実、千春との子供が想像できないからでもある。

そいつ（ねこ）が現れたのは、目の前の家が立ち退きで空き地になってからだ。

こここのところ、高速道路が出来るとかで立ち退きが続き（うちはギリギリセーフらしい）、その矢先にねこが迷い込んできたのだ。

甲高い声を上げて庭先にあらわれたので、俺はありあわせのシーチキンを「ほら」と言ってあげてみた。

そのときの千春の顔は、驚きと困惑に満ち満ちていた。

「ちょっと、なにそれ。ねこ？」

「ぶちってやつだよ。白と黒でかわいいだろ」

「どこから来たの？」

「たぶん」俺はねこをじっと見つめながら、「目の前に家あったろ？ あそこがなくなってから来たから、あそのねこだったんだと思う」

「捨て猫ってこと？」

「.....ゲージ用意しなきゃな」

「人の話きいてる？」

千春の視線を痛いほど感じる。俺は、あいつが何を言いたいのかよくわかっている。

自分の世話もできないのに、ねこの世話なんて出来るわけないでしょ。

「なつかなかったら、どうするのよ」

「エサを与え続ければ、なつくさ」

「病気でも持ってたらどうするの？」

「それは」千春の言葉に俺はどんどん下向きになってくる。「わかったよ、捨ててくる」

「.....よくそんな無責任なことできるわね。わたしは無責任なことをするひが大嫌いなの！」

千春の怒りが爆発して、しんとなった。そこに神経にさわるねこの鳴き声が部屋に響いた。

千春はベットにもぐりこみ、ちょっと間を開けてから、「これで、夜遊びもできなくなるわね」と背中で呟いた。

俺はあぐらをかきながら、はあ、と大きなため息をついた。

ねこはそんなことは我関せずとばかりに、にゃー、と鳴いて俺の顔を見てくる。

ふてくされた顔で、ヘルメットをかぶっている千春を見て、俺は内心ほっとした。そんなふてくされた面をしたってわかっているんだぜ。朝早くに、ねこにえさをあげていたこと。本当は全

然怒っちゃいないんだ。

その証拠に、バイクと一緒に乗るときに、お腹のあたりをぎゅっとするとき、仲直りの証なんだ。ほんとうに怒っているときは、力なくただ手をのせるだけ。あれやられるとすごくさみしいんだ。

朝飯にファミレスに入った。

「どう、もういっぱいおごるよ」

「いい、バイトにおくれる」

「いいじゃない」オレは今朝のこともあり、上機嫌だった。「こんなすがすがしい朝はめったにないぜ」

「だめ」彼女はたばこをもみけしながら、「そうやってあんたの誘いに何回のったと思っているのよ」

「いいじゃない」

「今日はだめよ。——わたしはあんたみたいにふらふらできないのよ」

俺は黙った。

俺だって、倉庫で週四で働いているじゃんか。楽じゃないんだぜ、単純労働も。

千春の職場につき、別れた。

俺は一人バイクに乗りながら、

——千春の手前、立派なことを言ったけど、あいつの言う通りかもな。ベランダのない狭い部屋でねこと暮らすのは苦痛だろうな。毎日、えさを買いにいかなくちやいけないし。俺の自由と金はどんどん奪われる。けど、ねこはそんなことにかまわず自己中心的に動き回る。耳に障る声をあげる。俺は苛々してくる。そして、結局、こいつのことが嫌いになってくるんだ。おれ自身が子供でいたいから、子供でいようとするねこのことが好きになれなくなってくるんだ。

それでも、——今回だけは飼うんだ。俺は変わってみせる。

俺はねこと二人で千春の帰りを待っていた。

帰りに買ってきたレトルトを小皿に乗せて食わせた。

が、ねこは鳴き止まなかった。

飯を食ったのに、なんの不満があるんだろう？

あ。

そのときはじめて便所に行きたいのか、と思いついた。

「じゃあ、外いけよ」

そう言って、ねこを外に行かせた。とにかくうるさかったし、俺になついでいなかったのが腹立たしかったのかもしれない。

俺は携帯でゲームをしながら、二人の帰りを待っていた。

千春は帰ってきた。

「あれ、ねこは？」

「外に行ったきり、帰ってこない」

「ちょっと、外、探しにいこうよ」

千春はいてもたってもいられない様子だった。

あんなにねこのことをディスっていたくせに、俺よりのめりこんでいるじゃないか。

俺は、

「どうせ夜探したって無駄だよ。明日の朝にしよう」

と言って千春をなだめた。

千春はベットで横になった。また、ふてくされているのかもしれない。

翌朝、——道路の真ん中で、ねこは死んでいた。

ごめんなさい。

公道を汚してしまいました。

人様に迷惑をかけたのは僕です。

「あんたには小さい子の面倒は見れないわ」

俺たちは空き地にねこを埋めてやった。

相談所のドアは開いていた。しかし、シャルロッテはためらい、入る決心がつかずにいた。この結婚相談所の中には、二人の先客がねばっていた。ひとりは、申し込みカードの閉じ込みをめくっている女。もうひとりは、さながらマンションの物件でも物色中の如く縁談を物色している裕福そうな奥様タイプの女。店の外のガラスケースに張り出された縁談カードの前には、ひとりの若い男性が陣取っていたが、そんなものを必要とするにはあまりに身なりが良すぎると思った。シャルロッテはその男性を無視して、《求む》《譲る》の広告を眺めた。「……猟銃、口径16、新型」とか、「グランドピアノ、ラケットおよび子供服」とか、拳句の果てには、「中国の壺、お買い得品」というものもある。この最後の張り紙を見て、シャルロッテは笑い出したくなった。彼女の家にもひどい中国の壺が後生大事にしまわれてあるのだ。

そうやって眺めている間に、店内から、所長らしき人物がシャルロッテに声をかけてきた。

「結婚相談所にこられた方ですね？ どうぞ、お入りください」

シャルロッテは軽くうろたえ、一礼し、入店した。

「お待たせ致しました。ご結婚でございますか？」

シャルロッテはびくっとした。それから、少し頬を赤らめた。結婚。なんでもない二文字も、こうしてずばり言い当てられ、面前に引き出されると、やっぱりなんだか気恥ずかしいものだ。

「ええ、とても真面目な相談なんです」

「ご心配なく。当社では、いかがわしい相談は一切お断りしております。高望みをされて失敗されたケースもいくつかございます。でも、大抵のお客様は、あなたと同じく、真面目なお嬢さん方ですよ」

そこで彼はごほん一つ咳払いをして、「それですね」と言って、具体的な話に入ってしまった。「お客様の申し込み番号は1985番になります。広告期間は三十日で、お料金の方は二百フランになります。三ヶ月の期限で郵便物を当社気付になさりたい方からは、さらに百五十フランの追加料金を頂いております。身分証明書をお持ちですか？ はい、結構でございます。ところで、なにか変名をお使いになられますか？」

「え？ 変名を使う方がいらっしゃるんですか？」

「そうですね。もちろん個人情報も克明に書かれる方もいらっしゃいます。ただ、お互いに初対面ですから、あまり、そういった個人情報をすべて列挙するのをためらうお客様もいらっしゃいますので、あえてお聞きしました。どうされますか？」

「…じゃあ、変名を用います」

「さようでございますか。では、こちらの方のカードにご記入ください」

どう書こうか。

わたしは決して高望みをしているわけではない。それでも、小さな望みはあるのだ。低収入ではない、バツイチではない、不健康ではない、等々、言わば「ないない」づくしの望みである。

シャルロッテは、しかめ面をしながら、次のように書きだした。

——当方、若い女性。

彼女は三十八だったから、自分をそう呼ぶ権利がぎりぎりあった。それから、考え考えしながら、ペンを走らせていった。

——当方、若い女性。年齢三十代。宗教／カトリック。職業／公務員。相応の年齢および社会的地位の男性の方と結婚を前提として交際したいです。ふまじめな方、お断り。《クリスチーナ》

「はい、結構でございます」

やれやれ、嫌な仕事が済んだ、とシャルロッテは思った。シャルロッテはカードを提出し、料金を払い、領収書をハンドバッグの奥深くに押し込み、R通りにある家に大急ぎで戻った。

そこで彼女は二十年以上も前から、兄のレーモンと同居生活を続けていた。彼はいつもシャルロッテよりも十分遅れて帰宅するのだが、当然、その日はすでに帰っていて、空腹に顔をむくれさせていた。

「おい、シャルロッテ、今日はずいぶん遅かったじゃないか。いったい何時になったら夕食を作ってくれるのかね？」と彼は皮肉を言った。

2

シャルロッテは両親の死後、レーモンとふたりきりで暮らしてきた。両親というのはシャルロッテの母とレーモンの父のことで、この二人はそれぞれ配偶者を失った後に再婚したのだった。

レーモンは最近三十九になったところだが、人からもう四十と言われるのが我慢ならなかった。年齢に関してはシャルロッテよりずっと敏感で、たまに口ひげに白髪が混じっていたりすると早速剃り落としてしまうほどだった。それでも、おしゃれには興味がならしく、身のこなしは固苦しかった。とにかくいつも真面目に見られたがっていて、週に一回、退屈きわまる法律見習生の親睦会に顔を出すといった男なのだ。シャルロッテとの同居生活においても、威厳が失われるのを恐れて不平不満も言わずに我慢している。世の中には他人との距離を適当に設ける人間がいるが、レーモンはまさにそういうタイプの人間であった。多少、毒舌家なところはあるが、意地悪いところはない。日ごろ履いているゴム底靴のゴムのように慎重で、愛用の旧式懐中時計の秒針よりも（自己管理が）正確だった。つまり、欠点を補って余りあるだけの長所も備えていた。ゆえにシャルロッテはこれまでこの独身男に、ほどほどの敬意を抱き続けてきたし、このひとはいいひとだ、とと思ってきた。そしてレーモンも二十年来、同じ感情でもって応えてきたのである。

「なぜ、今日はこんなにも帰りが遅いんだ？」

シャルロッテはこの質問に困った。

二人は平常からお互いの行動に関しては一切干渉しないことにしていたし、結婚相談所に行っていました、などと口が裂けても言えない。

「お店でちょっとひまどったもんだから」そう言って、シャルロッテは食事の準備をしだした。

キッチンの台座に置いてある鏡に自分の顔が映った。目はたどんで、生気がなかった。セミロングの髪の毛も、なぜかしら不潔っぽく映る。ああ、これでもう少しほうれいせんが薄ければ……などと考えているはずみに、シャルロッテは皿を地面に落として割ってしまった。

「おいおい、静かに！」

レーモンはいかにも不愉快そうな声を出した。

3

それから十日後、ようやく《クリスチーナ》たるシャルロッテは、再び結婚相談所を訪れる気になった。自分宛の手紙は来ていますか？ と問うと、係員は調べて、三通きております、と言った。

一枚目。これは、いたずらの手紙であった。わいせつ目的で、いやらしいことが三十行にも渡って書かれていた。シャルロッテはそれをずたずたに引き裂いてしまった。

二枚目。これは普通の手紙であった。ごくあっさりした内容で、シャルロッテは、可もなく不可もなく、と断定を下した。

三枚目。この手紙が三枚の中で、いちばん異様であった。封をきると、タイプで打たれた二枚の手紙が出てきた。かなりの長文である。そして、二枚目の最後の箇所には、《エドウッド》という名前だけが記されていた。シャルロッテはむっとした。変名を用いるなんて卑怯だ。それから、すぐに考え直した。そう言うわたしだって《クリスチーナ》じゃない。他人のことは言えないわ。それに、その文通相手は、変名を取り除けば、かなり詳しく身の上を説明していた。

――拝啓。

何ヶ月も前から結婚相談所のガラスケースの中をのぞいております者です。最初は貸借関係の広告に関心があるふりをしておりました。そのうち次第に《結婚》とある下にピンで留められた二、三十のカードを率直に眺めるようになりました。そして今日とうとう、そのうちから三つの番号を選び出し、返信を社気付にするため私書箱を借りた次第であります。

しかしながら、同じ内容の手紙を三通こしらえたわけではありません。そんな回状みたいなものを差し上げたら、それこそ不誠実きわまりないでしょう。

はじめての手紙で恐縮ですが、貴方にあやまるのが、多々あります。まず、ここでは本名を用いていないことを率直に打ち明けておきます。また、この種の手紙をタイプで打つのは不作法なことかもしれませんが、あえてそうしました。理由は、直筆でしたら、その癖などからこちらの性格がばれるかもしれませんが、また私自身、そうした筆跡による性格判断といったものを信用していないからです。私自身も貴方のTの字の横棒の曲がり具合を調べてみたいという誘惑をおぼえないように、あなたにもタイプの使用をおすすめします。そうすれば私たちはしばらくの間、余計な気遣いをしなくてすむでしょう。また、ある意味知らぬ者同士であれば、どんなことでも打ち明けられますし、それに姿を隠しているのですから、笑われはしないかと心配しなくてもすみます。

だからといって、好んで笑われたいわけではございません。

はっきり申し上げます。

私はもう若くない独身男性、貴方も若くない独身女性です。滑稽に笑いあって、偶然に頼るようでは、われながら愛想がつきというものではありませんか。

これだけの前置きをならべた上でなお、体重とか、身長とか、髪の毛の量とか、目の色、等々といったディテールを付加する必要があるでしょうか。そうした身体的特徴は馬を売るときには役立つでしょうが、今は省かせていただきますし、出来れば貴方もそうなさってください。ただ、健康である、ということのみを明言するだけで十分だと愚考します。

感情面でも厄介な問題は抱えておりません。つまり、忘れなければならぬ女性などいない、というわけです。独身というものは、なるものではなく、はじめからずっとそうなのです。……

彼女はところどころ反発を感じつつ、手紙を急いでおしまいまで読んだ。そして、（具体的な事柄が書かれてなくても）相手の男性のことは大体のみこめた。目立たぬ地味な生活。ささやかなエゴイズム。諦めの裏に隠れた少しの勇気。過度の慎重さと遠慮ぶかさ。それは彼女自身にも身に覚えのあるものだった。白状すれば、シャルロツテはまだ会ってもいないこの未知の男性が自分と似すぎていて、すぐには共感がわいてこないのだった。類は友を呼ぶ、と言うが、必ずしもそうとは限らないのだ。

それでも彼女は好奇心を抱いた。なぜ、この未知の男性はこれまでの生活に充足を覚えなくなったのか。それは同時に、こうも言い換えられる。なぜ、シャルロツテは自分の生活に充足をおぼえなくなったのか。

それから家に帰り、夕食をすませると、四ページ分の手紙の下書きに取りかかった。

「何をしているんだ？」とレーモンが呟いた。「シャルロツテ、それより、おまえは何時になったら美容院に行くつもりなんだい？ 不潔に見えるぜ。早く髪をセットしてもらってこいよ」

「言われなくても、そのうちいくわよ！」彼女は多少そっけなく答えた。それから続けて、「あなたこそ、何時になったらあのロクでもない中国の壺を処分するつもりなの？」

「わかってるよ」とレーモンは話を打ち切り、ため息をつき、毎晩お決まりの「じゃあね」も咳かずに自分の部屋に消えた。シャルロツテもため息をついた。この小さなケンカのおかげで、文通相手の男の方は得をした。つまり、シャルロツテにしてみれば、文通相手の男の方が、まだしも如才がなく、なによりデリカシーがある、と思ったのだ。彼女は返事の手紙の作成に取り掛かったが、なかなか難航した。いくつかの文章を削り、かわりに、ウィットに富んだ文章を付け加えたりした。相手の男性に幻滅されたくなかったのだ。こうしてさんざん手直しした末に手紙は出来上がった。

――拝復。

あまりご自身のことを、卑下なさらないで下さい。こちらまで困ってしまいます。確かに、私たちの人生には愛が欠けておりました。でも、一番欠けていたのは愛する能力なのです。今大切なのは、なぜ私たちが今独身のままなのか、ではなくて、なぜ今独身であることを止めようと思うようになったのか、を知ることはないでしょうか？ お返事、お待ちしております。

手紙を出してしまうと、一週間も待たなくて、わずか四日で結婚相談所へ足を運んだ。だが、エドウッドからの便りは届いていなかった。係員はそれとは別の二通の手紙を手渡した。一枚は妻と死別した男からのもの、もう一枚は離婚した男からのものだった。シャルロツテはそれらを即座に破り捨てた。自分は同時に何人もの異性と交際するような女ではない。

それから二日経ってまた見に来たが、依然としてなにもなかった。結果、シャルロツテは五度足を運び、五度頭の禿げた係員の皮肉に満ちた微笑に出くわすはめになった。そしてやっと自分の私書箱に一通の商用封筒を見つけた。こんどは彼女が微笑を浮かべる番だった。大急ぎで手紙を読んだ。

——故意に返事を遅らせてしまって、申し訳なく思っております。じつは文通相手が三人あって、そのなかから選びたかったのです。でも、これからは貴方だけにしようと思っております。……

シャルロツテの微笑はさらに拡がった。彼女は手紙を段落から段落へと読み進め、とうとう次のような箇所にししかかった。

——早咲きの人間、遅咲きの人間、どちらの輝きが美しいのか、私にはわかりません。ただ、われわれはきっと四十で人生がはじまる人間なのです。われわれは……

われわれだって。こんな代名詞ははじめてだわ。シャルロツテはわが家に小走りに戻ったが、途中、近所の美容院の前を通りがかったとき、なぜだかわからぬまま翌日の予約を取った。

5

六ヶ月間、この文通は続いた。途中で週二になったが、しかし依然として、変名のままだった。シャルロツテはナイトテーブルの引き出しの中にたまった五十通の手紙をラブレターだと思うようになった。エドウッドは、愚痴は一つもこぼさなかった。が、現実への幻滅や、過去へのこだわりの中に住んでいるような気配が文面に漂っていた。未来というものを、何もなかった過去の穴埋めとしか考えていないようなのだ。それは、シャルロツテにとって自分と重なる部分であった。

こうして、距離を置いた共犯関係のようなものが二人の間に生まれた。エドウッドは過去の手紙で次のように打ち明けていた。

——一目私の姿をご覧になったら、貴方はひどく幻滅なさるでしょう。でも、逆に一人の人間のイメージを壊してしまうには、一目見るだけで十分な場合もあるのです。

これもまた、シャルロツテ自身もおそれるところであった。ゆえに、シャルロツテはそれまでの自分の態度を改めざるを得なくなった。例えば、それまでは苦手であった寛容さとか同情心なども抱けるよう努力した。さらに、服装にもお金をかけるようになった。

その結果、同居人のレーモンから冷ややかな目で見られることが多くなった。感づいたのだろうか？ ひとり、取り残されることを予見しだしたのだろうか？

それから、不思議なことが起った。冷ややかな目で見っていたレーモンが、シャルロツテに歩調を合わせるように、自身の身なりに気を配るようになったのだ。シャルロツテはそういった心がけをうれしく思った。これまで彼に対し、余りにそっけなくしていたことを少し悔いた。「やっぱり、この人はいいひとなのだ」と彼女は思った。「ただ、エドウッドのように、内面的な豊かさがないだけなんだ」

六ヶ月。その間、シャルロツテは例の結婚相談所との契約を二度更新した。そこへ文通相手からの五十六番目の手紙が届いた。それは、短かった。

——クリスチーナ、もうそろそろ「かくれんぼ」は止めにしませんか？ われわれはこれまでとても真面目で、とても慎重だった。今では、貴方のことを十分に理解しているつもりです。以前話したような幻滅に対する恐怖は無くなりました。土曜日の正午に、例の結婚相談所の前でお待ちしております。目印は、こう決めておきましょう。***紙（新聞）の一番新しいものを広げて立っている男が私です。では、近いうちに。エドウッド。

その晩、シャルロツテはひどく興奮して家に帰った。不安のあまり待ち遠しいどころの話ではなかった。そんな変調子を見て取ったのか、レーモンは珍しく愛想の良さを示してくれた。シャルロツテは思う。

（わたしの動揺がモロに出てるから、気を使っているのかな？ やっぱ、この人には打ち明けるべきなんだろうか？）

しかし、彼が久しぶりにかけてくれた親切さに、水をかける（白状する）ような真似は出来なかった。

7

ついに土曜日がやってきた。その日は仕事が入っていなかったので、シャルロツテは朝の時間をおめかしにあてることができた。十一時には支度がととのった。慎ましく見せるため、お化粧品も薄くし、地味目なワンピースをチョイスした。

はちきれそうなほど緊張しながら結婚相談所の前に行くと、——はたして、一人の中背の男が突っ立っていた。こちらに背を向けて、新聞を広げて持っている。間違いなく、エドウッドだ。シャルロツテは近づいていった。その靴音に、男は反射的に帽子に手をあてがいがいながら、くるりとこちらを向き、その場に釘付けになってしまった。文通相手、それはレーモンだったのだ。

「こんなところで、なにをしているの？」とシャルロツテは気まずそうに話しかけた。

同居人を前にして、彼女は真っ青になっていた。彼の方はみるみるうちに真っ赤になっていった。だが、シャルロツテよりも早く落ち着きを取り戻し、

「この前頼んだ広告が、いい場所に出てるかどうか確かめにきたんだ」と彼は言った。「実は君の嫌いな例の中国の壺を売るために、六ヶ月前に一度出したんだ。でも、何の効果もなかったよ」

などと取ってつけた言い訳をするのだ。

レーモンは、盛んにまばたきしながら、背後に隠し持った新聞を折りたたもうとごそごそしていた。

（だめだわ）と彼女はとっさに思った。（わたしたち、ごまかせないんだから。これからの生活がやりきれなくなるわ）

「はじめまして、エドウッド」そう言って、彼女は嘔き出した。

すると、レーモンはいつものはきはきした声を取り戻し、

「まったく、おかしいよ。実際、僕たちは結婚したってよかったのに、一度もそんな気にならなかったんだからな」

8

もちろん、シャルロツテはレーモンと結婚しなかった。

しようと思えば出来るのだ。レーモンは義父の息子にすぎず、二人は実の兄弟ではないのだから。それに彼らはお互いに「いいひとだ」と好意を抱き合っているのだから。しかし、これまでずっと実の兄弟のように暮らしてきたのだ。結婚したら、精神的に近親相姦を犯したような気分になるだろう。その上二人は永年の間、お互いがお互いのことを知

りすぎてしまっていた。彼らは好意を抱き合っている。が、それが男女の愛に変わることはないだろう。何よりもレーモンが指摘したように、彼らは《一度も結婚する気にならなかった》のである。偶然のそそのかしのうちには、受け入れ難いものがあるのだ。

二人の生活は変わらなかった。レーモンはレーモンのままであった。多少口が悪いが、真面目で、他人との距離を置きたがる、退屈な男のままであったのだ。

しかし、今は二人とも独身生活をだらだらと続けているわけではない。大互いがお互い、独身であることをみずから選んだのだ。

この先も時折、険悪なムードになることもあるだろう。

そのときは、レーモンの腕をさわって、次のように言ってやればいい。

「エドウッド！」

すると、レーモンは瞬時盛んにまばたきをし、シャルロツテは少し頬を赤く染めるに違いないのだ。

ふたご座には、次のような言い伝えが残っている。

カストルとポルックスはゼウスがスパルタ王妃レダに生ませた兄弟であった。そのとき、レダは人間の夫との子も身ごもっていた。人間の血を濃く受け継いだカストルは死する身であり、神の血を濃く受け継いだポルックスは不死の身であった。

長ずるに及び、父であるゼウスはこの兄弟をことあるごとに冒険に行かせた。

弟ポルックスは血のつながりのせいで、このゼウスを嫌悪していた。ゼウスは全知全能の神であり、かつまた、好色部類としても知られ、その変身の能力を用いて、色事の限りを働いていた。レダもまたそのうちの一人で、ゼウスは白鳥にその身を変え、レダをみそめたのであった。加えて、なぜ父はこうも自分たちを冒険に行かせるのか、その真意を勘ぐらずにはいられなかった。しかし、相手は全知全能、下手に邪推しては自身の思案を看破されるやもしぬ、と懐疑心の強い弟は、父の命令には唯々諾々と従っては、兄カストルと共に冒険に繰り出すのであった。

それからというもの、彼ら兄弟は幾多の冒険をこなし、首尾よく武勲を立て、外界に対する立ち振る舞いにも齟齬がなく、双子の英雄として名高くなっていった。

しかし弟ポルックスは、この兄カストルがいつもけむたかった。賢人で、一步先を読まれている気がしていたのである。これまでの冒険の成功も兄カストルの水際立った知略のお陰であって、弟ポルックスは力まかせの役回りに過ぎなかった。それに兄の周りにはなぜか人が集まってくる。無意識のうちの優劣があるのだ、と弟ポルックスは面白くなかった。

兄カストルへの嫉視は、そろそろと秘密を作らせた。兄カストルの恋人を汚したのである。ただし、心の中でであった。弟は父の放蕩癖を忌み嫌うあまり、色恋沙汰を不浄なものとしてこれまで嫌悪していた。それが、心ひそかに汚して享樂してしまった。この不名誉な秘密を持って以来、常に見えない引け目がつきまとった。誰も知らない。兄カストルも知らない。しかし、全知全能の父だけはあなどれなかった。

彼らの最後の冒険は従兄弟とアルカディアに牛の群れの狩りに行ったときである。夕暮れ時、獲物の分配を巡り、従兄弟と争いが起こった。カストルは弓矢で殺されて、ポルックスも意識を失ったとき、ゼウスが雷電を落とし、騒動を止めた。

不死であった弟は現世に残された。

弟は別段悲しくもなかった。兄が死す運命にあることも、自身が不死であることも、うすうす気づいていたのであった。それよりも、父の政治的な思惑に気がついた。

――自分の懷疑はやはり当たっていた。あれほど冒険に出させたのも、あの夕暮れの悲劇にしても、すべて父が用意した演出であったのだ。神族の一生は後生神話という形で人間の世に喧伝されて生活の規範となる、という話は耳にしていた。やはりそんな歴史的な思惑があったのだ。そうでなければ、兄が死んでから、自分を助けるものでもあるまい。きっと父は、ああ、私は兄なしでは生きていけませぬ、兄と一緒にいさせてください、と泣いて懇願する自分を見て、天

晴れ、みごとな兄弟愛、世の兄弟たちよ、二人を手本にして、仲良くしなさい、そんな感動の結末を期待しているに違いない。

それでも、弟ポルックスは選ばなければならなかった。

弟ポルックスはなによりも自分一人が生き残って父に向かって本音を言わなくてはならないという状況こそが、れいの秘密の犯罪を暗に冷笑したあてつけに思えて、矢も盾もいられぬ思いなのであった。

弟は一世一代の思案にくれ、無い知恵を絞り絞り、ようやく解決の法を探り当てた。

それは自分を資源にすることであった。

不死身であるから死ぬことはできないが、それは逆に言えば永遠に生き永らえることが可能ということである。ならば、人間におのが意思を植えつけてやろう。さすれば、永遠に人間は疑いを持つようになるはずだ。幸いなるかな、弟ポルックスには父の能力である変化の能力が備わっていた。弟ポルックスは雨になって大地に降りそそいだ。

こうしてポルックスは人間のからだの一部として今も生き永らえている。それ以来、人間はものを疑う法を覚えた。それは後年、人間によって「自意識」と名づけられた。「神は自分の中にいるものだ」という論が出没しだしたのも、このためであった。

しかし、弟ポルックスの懊悩は杞憂にすぎなかった。全知全能の父ゼウスでも人の思慮までは読めなかったのである。つまり、弟ポルックスの真意は最後の最後まで誰にも解されることはなかったのであった。

むかし、ある村に貧しい母親と息子が住んでいました。

元来、この家は代々からの長者で、早くに死別した父親は名実ともに働き者で、かなりの財産を残していきました。けれども、その財産は早々に底をつき、今ではその日一日の飯にも困るような有様でした。なぜなら、その跡取りたるひとり息子が、父親が死んでからというもの、なんの働きも見せなくなり、不貞にも来る日も来る日ものんきな顔して寝てばかりいて暮らしていたからです。このひとり息子はとても美男子で、前途も有望視されていたので、母親も、村の人たちも、その唐突な変化に驚かざるをえませんでした。

一人、外で野良仕事をしている母親は、寝床で横になっている息子を見るに見かねて、言いにくそうに注意を促すこともありました。

「少しは、若者らしく働く気がないのかい？ そんなに毎日毎日寝てばかりいたんじゃ、ほんとうの病人になってしまうだろうに」

それでも、そのひとり息子は平気の平左で、

「いや、はい」と意味不明な返事をよこし、「すみませんが、まだ、その時期がきていないのです」と穏やかな口調で言って、後はいつもどおり、のほほん顔して眠ってしまうばかりで、一向に埒があかない有様です。

よく晴れた日には、空が青いなあ、と言ひ、雨が降った日には、天気が悪いなあ、と言う、そんな白痴にも似た我が子の生活態度に接すると、母親は深いため息を漏らさずにはいられませんでした。「やっぱり、片親というのがいけなかったのかしら」

この村一番の美男子、かつ、代々の家名に泥を塗ったひとり息子の名を、村中で知らぬものはおらず、挙句の果てには「なまけ太郎」という不名誉なあだ名までつけられ、さだめし、村のお笑い草になっていました。次第に親である母親さえもが、「ほら、なまけ太郎、起きなさい。外はいい天気ですよ」などと、「なまけ太郎」というあだ名の方で呼ぶようになっていました。

一事が万事そんな調子なので、大晦日になっても近所の家々は皆お正月の準備ができたというのに、なまけ太郎の家だけは、餅をつくどころか、米を買う錢さえありませんでした。母親は己の身が無性に侘しくなり、独り言のようになまけ太郎に不平を言います。

「もし、お父さんが生きていて、こんな家の状態を見たらなんと言うだろうね。明日はもうお正月だっていうのに、なんの準備もできていやしないじゃないか。一体、私たちはこれからどうすればいいのだろうね」

するとなまけ太郎は、

「いや、はい」とまたもれいの曖昧な返事をよこして、「お母さん。そんなに心配しなくても大

丈夫ですよ。まあ、見ていてください。しこたま儲ける妙案を思いつきましたので」とだけ言い残し、また呑気そうにすやすやと眠ってしまいました。

母親は、深いため息をつきました。

そうこうしているうちに大晦日は暮れてしまいました。

そして、皆が寝静まったころ、なまけ太郎はゆらりと起き上がり、今まで見せたことのないような神妙な面持ちで、「一仕事。一仕事」と独り言をつぶやくと、何を思ったか、せっせと紙で袴をこしらえ、渋柿を塗って染め上げました。一通り、その作業を終えると、なまけ太郎は、にやりと微笑んで、そして横になったが早いか、またすやすやと寝てしまいました。

母親が起きてみると、なんと、寝床になまけ太郎の姿がありません。

「ああ、怠け者の節季働き、とはよく言ったものだよ。まったく、とんだ発心だよ。盗みでも働いているんじゃないだろうね。ああ、あの子は一体誰に似てあんなになっちゃったのだろう」

そう言って、母親はしんからなまけ太郎に呆れ返りました。

三

なまけ太郎は、あかつきを告げる頃、寝床から抜け出していました。大晦日に仕立てておいたらしい紙の袴を着込んで、隣の家を井戸神様の石像に身をひそめ、なまけ太郎はそのしこたま儲ける妙案とやらを実行に移すことにしたのでした。

「ああ。どうか、我が娘に、いい縁がみつかりますように」

隣の家を主人は、そうつぶやいて、井戸神様の石像に祈りを捧げていました。

井戸神様というのは、この村において古くから信仰されている神様のことで、毎日欠かさず祈りを捧げていると幸福を呼ぶとされていました。

この隣の家は、以前からなまけ太郎の家とは財産的に実力伯仲で犬猿の仲でしたが、なまけ太郎の家が没落した今では村一番の長者でした。年頃の美しいひとり娘がいて、盲信的な井戸神様の信仰者である主人は、日頃から、いい縁がありますように、いい縁がありますように、と井戸神さまへの祈りを忘れず心がけてきましたが、なかなかどうして、これという良縁には恵まれませんでした。それがこの主人にとって唯一の悩みの種でした。

主人が拝み終えて井戸から若水を汲もうとすると、あのなまけ太郎がひょいと姿を現しました。そして、威厳のある低い声を繕って言いました。

「おい、下賤の者よ。よく聞け」

「井戸神様？」主人は戦々恐々として、思わず持ちかけた勺を地面に落としてしまいました。

「よいか、これは天命じゃ。隣の家をなまけ太郎を娘の婿として迎えよ。さすれば、そなたの家はさらなる福に恵まれるであろう」

「へえ」主人は、声にならない声でそう答えると、急転直下、こりゃ一大事だ、こりゃ一大事だ、と念仏の如く繰り返し唱えながら、疾風の如く家の中に駆け込み、奥さんに報告しました。

「おっか！ こりゃ、一大事だぞ。驚くな。ついさっき、あの井戸神様が現れたんだ」

「あら。元旦から愉快なこと」

「馬鹿！ 笑い話じゃないのだ。隣の家のなまけ太郎を婿に迎えろ、なんて突飛なことをおっしゃるのだから、いよいよ笑い話ではあるまい。どうする。こりゃ一大事だぞ」やたらめったら唾を飛ばして叫喚するので、奥さんは大いに閉口しました。

「呆れた。言うまでもなく、私は反対ですよ。うちの娘は、私の口から言うのもなんですけど、美人で、器量のいい子に育ちました。その結婚相手が、あんなぐうたらななまけ者じゃ、どうしたって釣り合わないでしょう。貧乏神までこっちにうつってしまいます」

「しかし、あの井戸神様が言われたんだぞ。たしかに、この目で見て、この耳で聞いたんだぞ。無視することはできん」老いの頑固で臆面もなく言い切るので、奥さんも呆れていると、その問題のひとり娘が、この両親の言い争いを聞きつけて奥の部屋から出てきました。「私、井戸神様がそう言うのなら、なまけ太郎を夫にしてもいいわよ」

娘は顔を赤らめていました。

娘の賛同の言葉を聞くやいなや、「そうか、そうか」とみるみるうちに主人は嬉々満面になり、奥さんは少し納得のいかなそうな顔をしましたが、「まあ」とため息をつき、「お前のことだからね。お前がいいと言うのなら、私もそこまでは反対しないよ」と仕方なしに承諾しました。

決して親心を汲んでの決断ではありませんでした。娘は、以前より、なまけ太郎の花顔に恋していたのでした。

四

そんなこんなで、なまけ太郎を婿にとろう、という運びになり、さっそく仲人を立てて縁談を進めてもらうことにしました。仲人は、翌日、なまけ太郎の家にこの縁談をもちかけに行きました。しかし、なまけ太郎の母親は、不思議なほどきっぱりとこの縁談に反対しました。

「あれは、あんな怠け者でどうしようもない息子ですけれど、たったひとりの息子には違いありません。丁重に断らせていただきます」

「いやいや、どう考えても、悪いようにはならんぞ。なんせ、あの井戸神様直々のお告げなのだからな」

「馬鹿らしい。あんな古い神様のことを、あなた方は、まだ信じておられるんですか」

「ああ、わかったよ。こうなりゃ、直接、本人に聞いてみようじゃないか。おい、なまけ太郎はどこにいる？」

「どこにも行きはしません。まだ寝ていますよ。午前中に起きて活動するなんて、まずありえませんかからね」

すると、なまけ太郎は穏やかに微笑みながら寢床から出てきました。

「先ほどから、お話の方は、聞いておりました。僕でよかったら、喜んで婿になりますよ」

なまけ太郎は唯々諾々と即決してしまいました。そのとき、ちらと母親に目配せしました。それを見た母親は、何を思ったのか、なにか諦め半分に納得した様子で、ため息をつき、「しょうがないねえ」と急に折れてしまいました。

かくして、なまけ太郎は隣の家の婿となりました。

しかし、箱を開けてみれば、やっぱりその怠惰な態度は相変わらずで、仕事は一切せず、娘が一生懸命働くそばで、睡眠三昧、しゃあしゃあ然と寝っ転がって暮らしていました。娘は憎々しげにその美しい寝相を眺めながらも、はじめのうちは、いずれ見よう見まねで一人前に働いてくれるだろう、と一縷の期待を込めつつ、この体たらくを長い目で見逃していましたが、一年経てど、二年経てど、待てど暮らせど、働く気配はありません。性温厚の娘もさすがにいい顔は出来なくなり、冷厳な口調でなまけ太郎に詰問しました。

「あなたは、なぜ、働く気がないのですか？」

それでも、なまけ太郎はれいの調子で、おだやかに微笑みながら、

「いや、はい」と曖昧に誤魔化してから、「僕は、なまけ太郎ゆえに、なまけて暮らしているのです」とだけ言い添えて、またごろっと横になりました。

娘はそののほほん顔を見て、いい食べ物にされたと思って、癩癩を起こしました。「罰当たり！今すぐ、出て行ってください！」

そう大声で言い捨てるも、むごい返事、なまけ太郎はいびきを放ってよこすのみでした。

五

家族内で相談した結果、やはり、なまけ太郎には帰ってもらうことに決めました。

ふたたび仲人がなまけ太郎の家に行って、なまけ太郎を引き取ってくれ、となまけ太郎の母親に懇願しました。しかし、母親もここに到って何か感づくものがあつたのか、狡猾なほど落ち着き払って拒否しました。

「それは無理な相談です。第一、話が違いますよ。こちらは、最初から嫌だと言ったんですから。それを、あなた方は無理やり説き伏せて私の息子を婿にとったんじゃないですか」

「いや、道理から言えばそれは最もな話だが.....」仲人は立つ瀬がない思いで、必死に食い下がりました。「とにかく、なにがなんでも、引き取ってくれなければ困るのだ。こちらは大いに迷惑なんだ。お願いだ」

母親は、ますます落ち着き払って、

「まあ、いいでしょう」と言い、ふと語調を変えて、「ただし、それなら分相応のお金を払ってもらいます」

仲人は二の句が継げませんでした。隣の家はなす術がなくなり、とにかく何が何でも、なまけ太郎に帰ってもらった方が得策だとよんで、この母親の無理な条件を呑むことにしました。

こうして、なまけ太郎の一世一代の賭けは成功し、たんまりお金を貰って帰宅しました。

最後の方はうすうす気づいていたものの、母親もこのなまけ太郎の妙案には大いに驚嘆しました。まんざら無能無策のでくの坊ではなかったのか、と感無量の態で、なまけ太郎に告白しました。

「なまけ太郎や、お前の妙案とは、こういうことだったのかい。驚いたよ。実を言うとね、私は、お前を諦めていたんだ。縁談のときもね、内心いい機会かもしれないとさえ思っていたんだ。だけど、こんなに利発なことをしでかすとはねえ。お母さんは、お前を見直したよ。なまけ太

郎や、これで私たちは暮らせていけるよ」

なまけ太郎は、やはり穏やかな表情を崩さず、次のように答えました。

「いや、はい。僕は、ただ、自分の名前に従っているだけです。人には、それぞれ天職というものがありますから」